

# キリスト教と禅の相克と調和

## —ヴィリギス・イエーガーの場合—

清水 大 介

(花園大学・文学部 教授)

### (和文要旨)

標題は「キリスト教と禅の相克と調和」である。キリスト教と禅の「相克」の面では、禅とキリスト教神秘主義によって、苦悩する現代人の救済に挺身した司祭イエーガーが、バチカン教理聖省より活動停止処分を受けた事件を取り扱う。キリスト教と禅の「調和」の面としては、グローバル化した世界におけるキリスト教と仏教の相互対話の深化と将来の諸宗教の統合の可能性のために、イエーガーにおいてどこまでキリスト教神秘主義と禅が同質的であるかを検討する。イエーガーにおけるキリスト教神秘主義と禅の共通性としては、第一に、「意識の集中」と「意識の空化」という二つの修練の構造が同一であることが挙げられる。第二に、キリスト教神秘主義の神の経験は、禅で「真空妙有」とか「一切現成」といわれている経験と非常に似通っている。神は「無相の自己」である。しかも、人間が絶対者と等しいのではなく、絶対者から人への通路が開かれているだけであるということも、キリスト教神秘主義と禅に共通の特色である。

### (SUMMARY)

The title reads "Conflict and Harmony between Christianity and Zen." In regard to a conflict between Christianity and Zen the case of Jäger is treated here. In this case the Benediktine Father Willigis Jäger by Würzburg, who spiritually assisted despairing people in the courses of mysticism and Zen for a long time and successfully, was given a speech-, writing- and course-prohibition by the Roman Congregation for the Doctrine of the Faith. Now the question about the harmony between Christianity and Zen, above all between mysticism and Zen, must be set up necessarily for the deepening of the discussions between Christianity and Buddhism and also in view of the possibility of an integrating of religions in the age of globalization. Therefore this paper examines, how far the Christian Mysticism agrees with the Buddhist Zen in Jäger's thoughts. It concerns his mystic key

sentence: “God reveals himself in the tree as tree” which you can find a correspondence with Zen and also with Buddhist basic ideas at all. The point is the absolute realization, which manifests itself from the absolute nothingness, that is, the realization of the formless self, which is felt with the Christian Mysticism as God. It must be pointed out, however, that a human as the particular cannot be the absolute, although he contains it as it were in himself, but that only the absolute can become human. The same says now also in Zen.

## 序

標題は「キリスト教と禅の相克と調和」である。キリスト教と禅の「相克」の面では、禅とキリスト教神秘主義によって、苦悩する現代人の救済に挺身した司祭イエーガーが、バチカン教理聖省より活動停止処分を受けた事件を取り扱う（第1節）。キリスト教と禅の「調和」の面としては、グローバル化した世界におけるキリスト教と仏教の相互対話の深化と将来の諸宗教の統合の可能性のために、イエーガーにおいてどこまでキリスト教神秘主義と禅が同質的であるかを検討する（第2節と第3節）。紙幅の制約のために、当然起こってくるはずの疑問である「絶対者の人格性と人格神宗教」の問題については、ここでは割愛しなければならなかった。この問題の解決に向けての糸口だけ前もって述べておくならば、イエーガーのいう人と神との合一の根源の働きである「第一現実」には、人格神信仰において向かい合うとされる人と神とのコミュニケーションの働きが当体に入っているのである。イエーガーの禅と神秘主義思想については、到底ここで書きつくすことはできないので、関心の持たれる方は、是非とも、

[http://www.geocities.jp/simizu\\_daisuke/index.html](http://www.geocities.jp/simizu_daisuke/index.html)

を訪問して下さいようお願いします。

## 第1節 イェーガー事件（2002年）

すでに早くから、キリスト教神秘主義の代表者であるエックハルトのドイツ語説教と東洋の禅思想の間には類似点が多く、両者の親縁性が高いことは禅思想の側から指摘されていた。この面の比較研究で先駆的な業績を挙げたのは、鈴木大拙、西

谷啓治、上田閑照ら禅の人々である。

キリスト教神秘主義の側から禅へ接近した先駆者には、例えばトラピスト会修道士のトマス・マートンがいる<sup>1</sup>。しかし、彼は禅を実修したわけではない。

キリスト教神秘主義の人が禅をも実修し、両者の親縁性について語りうるという、人類文明史上画期的な事態が生ずるようになったのは、何と云っても、カトリック教会が第二バチカン公会議（1959～1965）で他宗教との対話路線を打ち出してからである。

日本では、イエズス会のフーゴー・<sup>えのみや</sup>愛宮ラサール（Hugo M. Enomiya-Lassalle）神父が、いち早く 1956 年から小浜の原田祖岳<sup>おぼま</sup>老師のもとで本格的な禅修行を開始し、後年ヨーロッパにおいて熱心な禅の普及活動を行った。

ヨーロッパにおける愛宮ラサールの努力からは、たくさんのキリスト教聖職者で禅の修練を実修する人が育っていった。その代表的な一人に、ドイツ、ヴュルツブルクのベネディクト会修道院のヴィリギス・イエーガー（Willigis Jäger、1925年生）神父がいる。若い頃からキリスト教神秘主義に深い関心を抱いていたが、すでに修練の仕方の伝統が失われ、実践的にどうやったらよいのか、どうしてもわからないところがあったらしい。そこで、折から愛宮ラサールや弟子丸泰仙<sup>でしまるたいせん</sup>らの努力によって欧州に広がり始めていた禅の修行に接近した<sup>2</sup>。

イエーガーは、ようやく 50 歳近くなってから、修道院の許可を得て 1975 年に鎌倉に派遣してもらうことができた。そして、原田祖岳の法系に当たる山田耕雲老師のもとで 6 年間に渡り禅修行に没頭し、1981 年に室内を終了した。それ以前の年月を含めると、12 年に渡る歳月をイエーガーは禅の修行に捧げたことになる。帰国後、1983 年にヴュルツブルクの修道院の附属施設として瞑想センター「ハウス聖ベネディクト」を設立し、禅修行を取り入れたキリスト教神秘主義の修練と霊性の復興に力を尽くした。1996 年に、耕雲老師の後継者の窪田慈雲老師に嗣法し、正式に禅の師家の資格を取得している。仏陀の法系にも正式に入ったのである。

イエーガーが「ハウス聖ベネディクト」で開催したキリスト教神秘主義（観想 Kontemplation）と禅（接心）の講習会は、非常な人気を集めた。講習会中は、一日

<sup>1</sup> Merton, Thomas, *Mystics and Zen Masters*, New York 1961; Merton, Thomas, *Zen and the Birds of Appetite*, New York 1968.

<sup>2</sup> 「私は苦労して自分で道を探さなければなりませんでした。神秘家たちの（テキストの）記述を見つけるばかりのみで、（実際どのように修練するかという）彼らの実践は見つけませんでした」（Jäger, Willigis, *Die Welle ist das Meer*, Freiburg i. Br. 2000, S. 120。以下、WM120 というように略記する）。

に百人くらいの受講者と個人的カウンセリング（独参）を行うこともあったと伝えられる。「ハウス聖ベネディクト」時代の最後の頃には、一年間に2000人以上の講習会参加者があった。様子のわからない新興宗教としての禅ではなく、カトリックの司祭がやっている神秘主義と禅ということもあって、大きな信頼が寄せられたようだ。

2002年の時点で、イエーガーの弟子は、全欧州とアメリカ・フィリピンにまで広がり、登録者数は約7000人に達するといわれる。著書の公刊や講演活動も活発である。著書は英訳も含め、各国語に翻訳されている。カトリック聖職者の顔を合わせ持っているとはいえ、イエーガー<sup>こうん</sup>虚雲老師はその活動力と成果において、現在西洋世界最大の禅の老師であるといっただろう<sup>3</sup>。

だが、これだけ活動が目立ってしまうと、カトリック教会内超保守派<sup>4</sup>が黙っていない。

確かに、イエーガーは神秘主義的ないし禅的に、信仰箇条を超える「超宗派的靈性」(transkonfessionelle Spiritualität) (WM59) を主張する。禅の「教外別伝」に相当する。それに対して、超保守派はヨーロッパの中世的な世界観に依拠するカトリックの伝統的なドグマを至高のものとする。しかし、イエーガーは、超宗派的靈性の存在を唱えながら、同時に各自が出自の宗派に留まるように勧めている。彼自身もキリスト教聖職者であることを止めようとしなない。なぜなら、超宗派的靈性はどの宗派をも超越しつつ、どの宗派にも宿っていると彼が考えるからである。だから、神秘主義的ないし禅的な超宗派的靈性という主張自体は、超保守派によるイエーガー排斥運動の直接的な訴追理由にはならない。理由はもっと表面的であり、動機は政治的である。

イエーガーは、講習会で実際に精神的に苦悩する人々とのカウンセリングを繰り返す中から、経験主義的に思想形成を行ってきた。机上の空論を展開しているわけではない。ところが、講習会発足の当初こそキリスト教関係者が多かったが、次第に洗礼を受けていない人々や、教会から離脱しながら靈的探究を求めている参加者の割合が増えていった。受講者の層が飛躍的に広がってしまったのである。そこで、こういう真に迷える人々を何とかして現実に宗教的に救っていくことが、イ

---

<sup>3</sup> 現在の講習会センターになっている「ベネディクトゥス・ホーフ」には、全欧州から約三百の坐禅グループが結集している（イエーガーのインターネット・ホームページより）。

<sup>4</sup> ここで「超保守」という用語は、一般報道機関で使用されている使い分けに従った。超保守派自身は、自分を超保守と呼ばないであろう。

イエーガーの大きな課題になった。そのために、彼は次第にカトリックの信仰箇条や聖書を現代にマッチするように再解釈する必要に迫られるようになった。また、苦悩する現代人に宗教をわかってもらうために、現行のカトリック信仰箇条とは必ずしも相容れない現代科学の世界観の受容の方向に進むようになった<sup>5</sup>。だが、こうした柔軟な、変革をも辞さない司牧活動が、反面、現代の時流に抗して超保守的な態度を堅持するバチカン教理聖省の引き締め路線とは矛盾するであろうことは、今日事情を知る人には誰しも理解されるところである。イエーガーの、苦悩する現代人の救済への献身的努力と徹底的な現実主義が、超保守派との対立を招いたとみてよい。そして、開かれた愛の精神による衆生済度への献身的努力と、それに基づく徹底的で柔軟な現実主義こそ、キリスト教神秘主義と禅に共通する本質的態度であった。

かくして、イエーガーは、彼の先達のキリスト教神秘家たちに襲ったのと同じ運命を辿ることになる。修道院を統制しているローマのバチカン教理聖省に、超保守派の活動家グループから直接訴えがなされた。教理聖省は中世の異端審問庁の後継機関でもある。ウルトラ保守派の親衛隊グループは、イエーガーの講習会にこっそりスパイを送りこんで、異端情報を収集したらしい。バチカン内では、第二バチカン公会議当時の開放的で改革的な雰囲気は、ポーランド出身の超保守的なヨハネ・パウロ二世の長期政権のもとで、完全に引き締めめに転じていた<sup>6</sup>。遂に、法王の右腕の教理聖省長官のラッツィンガー枢機卿（現法王ベネディクト十六世）が動き出した。そして、イエーガーとの間でほんの僅かなやり取りがなされたあと、2002年初頭にイエーガーの司祭職に対して活動停止令が発令された。中世だったら、異端宣告で火刑というところだっただろう。教理聖省内における審理は非公開である。事件は世論の注目を集めるところとなった。超保守派の活動家たちは凱歌を上げたが、一般世論はおおむねイエーガー神父に同情した<sup>7</sup>。イエーガー神父に関するドキュメ

---

<sup>5</sup> Jäger, W., *Das Leben ist Religion: Stationen eines spirituellen Weges*, München 2005, S. 121-123.

<sup>6</sup> 引き締めめに転じた理由としては、伝統的なキリスト教信仰の精髓を守り、カトリック教会という巨大組織の瓦解を防ぐという意図が推定される。

<sup>7</sup> 禁止令に対する世論の態度の例を挙げると、「カトリックとプロテスタントのクリスチャンのイニシアティブ」という団体は禁止令を即刻解除するように要求している。「事実上職業禁止と等しいではないか」というのが理由である。また、事件を報道した「南ドイツ新聞」や「パブリック・フォーラム」の新聞読者欄では、ヴィリギス神父が「教会の他の公職保持者よりももっと、探し求めている人々を再び神へと近づけた」ことが指摘され、活動禁止令の一番の意図が教会の権力保持と真なる信仰の独占要求にあるのではないかと批判されている（NDR 北ドイツ放送局 2002 年 6 月 23 日 8 時 40 分ラジオ放送、アンナ・ハルトヴィッヒ執筆「真夜中は昼の始まり」より）。

ンタリー放送番組が一度にいくつも流れた。インターネット検索エンジンは、イエーガーに関するリンク集を特別に設置した。抗議の手紙が新聞社や司教区宗務局に殺到した。人々は、イエーガー神父が、「ハウス聖ベネディクト」での講習会を通して、悩める一人一人の魂の面倒を見、失われたキリスト教信仰への本当の霊的な目を開かせ、再び教会へと立ち帰らせ、もって人々を救う活動を地道にやってきたことをよく知っていたからである。こうした圧倒的な世論の声は、反面、現時点におけるいわゆる「要塞バチカン」と形容される状況を凶らずも描き出しているといえるかもしれない。だが、司教によるとりなしがなされたにもかかわらず、一度出たローマの活動停止令は撤回されなかった。

暫くの沈黙の後、イエーガーは、各方面と協議の末、活動を続行しても周囲に迷惑がかからないように、修道院に対して暫時の休暇を取ることを決意する。このことは、長年住み慣れた修道院から離れることと司祭の権能の一時停止を意味した。ベネディクト会修道士ではあり続ける。「これまで付き添ってお世話してさしあげた方々を、ここで見捨てるわけにはいかないのです」と彼は語っている。このとき、彼は77歳の老人となっていた。修道院長は「いつ戻ってきてもまた受け入れる」と公式声明を発表した。しかし、もう修道院付属の「ハウス聖ベネディクト」を使うことは許されない。幸いに、ある女性投資家が、昔ベネディクト会修道院として使用されていた「ベネディクトゥス・ホーフ」という古い建物を提供してくれた。ヴェルツブルクの郊外に位置する。建物の改修工事を終えてから、2003年末より、イエーガーとその仲間たちは、またそこで元気に講習会を再開しているようである。

## 第2節 キリスト教神秘主義の修練と禅修行の構造的類似性

さて、それでは、そもそも、イエーガーの双修したキリスト教神秘主義と禅には、どの程度と同質性が見られるのであろうか。こうした考察は、キリスト教と仏教の相互対話を深め、将来の諸宗教の統合の可能性を探るのに、必要な基礎を提供するであろう。

イエーガーは、キリスト教神秘主義と禅の同質性について次のように語っている。

私としては、長年の禅修行によって初めて、キリスト教神秘主義がその核心において禅宗とまさしく同じことを教えている、とわかりました。(WM65)

禅がキリスト教神秘主義と同じ構成要素を含み、困難も経験それ自体も広汎に

同じであるということを見出すことは、私にとってわくわくするような素晴らしいことだったです。(WM117)。

キリスト教神秘主義と禅の共通性は、まずその修練の仕方の根本構造の類似にある。修練の仕方の根本構造には二つあって、それは意識の集中 (Sammlung) と意識の空化 (Entleerung) である。この二つの修練の根本構造はキリスト教神秘主義と禅に共通である<sup>8</sup>。

意識の集中とは、心をまとめ、しずめる修練である<sup>9</sup>。それには、ある一焦点に意識を集中・統一するとやりやすい。意識の集中点として利用されるのは、一般的には呼吸、音声、単語、連祷句などである。典型的には、キリスト教では「イエスの祈り」<sup>10</sup>、禅では公案「無」が意識集中の焦点として使用される。その他の宗教では、浄土教では念仏、スーフィズムではアラーの名前、ヨーガでは聖なる「オーム」が、修練の際に意識が集中する焦点として使われる。

イエーガーの講習会では、「イエスの祈り」よりもさらにつづめて、英語なら love とか God、ドイツ語なら Jesus とか Logos のような任意の一単語を念ずるようにさせているが、これはイエーガーが禅の影響を受けて独自に新しく発案したのではなく、すでに過去のキリスト教神秘主義で行われていた修練の方法を踏襲したにすぎない。その代表例は十四世紀英国の作者不詳の神秘主義の著作『不可知の雲』に見られる<sup>11</sup>。

こうした意識の集中の修練において大切なのは、念ずる単語の意味についてあれこれ考えるのをやめるだけではなく、一般にあらゆる雑念と分別活動が停止されなければならないということである。雑念と分別活動の停止については、『不可知の雲』だけではなく、十字架のヨハネ、アビラのテレサ、オーガスティン・ベーカー、

<sup>8</sup> WM119, 51. Seitlinger, M. und Höcht-Stöhr [Hrsg.], *Wie Zen mein Christsein verändert*, Freiburg i. Br. 2004, S. 59 f.

<sup>9</sup> 「意識の集中」は、仏教では「サマーディ」(三昧)と呼ばれているものである。また、それは、日本のカトリック教会で「潜心」と呼ばれているものに対応している。「潜心の祈り」などと言われる。

<sup>10</sup> 「イエスの祈り」とは、東方教会、特にヘシカスモス(静寂主義の意で、アトス山を中心に起こった神秘主義思想。グレゴリオス・パラマスが代表者)で行われた簡素な祈り方。吸う息でイエスの名を唱え、吐く息で「罪人の私をあわれみたまえ」と唱える。その際、意識の焦点を頭脳から心臓に移すようにする。

<sup>11</sup> 『不可知の雲』第七章の末尾で「単語を念ずる」ということが論じられている。Johnston, William (ed.), *The Cloud of Unknowing and The Book of Privy Counseling*, New York 1973, p. 56 参照。また、同じ頁では、念ずる単語の意味を考えてはならないことも述べられている。『不可知の雲』の日本語訳には、奥田平八郎訳、現代思潮社、1969年、と、斎田靖子訳、エンデルレ書店、1995年、がある。後者には「個人カウンセリングの書」も付いている。

エックハルトなど、他の神秘家たちも一様に主張していることである<sup>12</sup>。そうしなければ、観想において神経験に到達することはできない。観想や接心の修練の実際には、七転八倒の心ブロックや魔境との闘いが繰り返される。その場合頼りになるのが、集中の依りどころとなる単語や音声である。

意識の集中の修練のあとか、または同じ時にも行われる修練が、意識の空化である。意識空間自体は元々空であり、鏡のように映すだけである。意識空間に浮かび上がってくる想念はすべて意識空間それ自体に固定化されず、一切はやり過ぎされるだけになる。ちょうど、鏡が、すべてのものを映すのに、そのどれとも自己同一化しないようなものである。こうした意識の空化の修練は、禅では「只管打坐<sup>しかんだざ</sup>」であり、キリスト教神秘主義では「静謐の祈り」といわれるものに当たり、『不可知の雲』の作者の言う「裸の自己存在の覚知」<sup>13</sup>、十字架のヨハネの言う「愛をこめて注意を向けること」<sup>14</sup>、「純粹注意」である (WM119)。ここでは自我の活動が静まる。明るく目覚めたプレゼンスだけがある。想念は行ったり来たりするが、とどめられようとはしない (WM51)。

さらに、イエーガーは、エックハルトと『不可知の雲』を引きながら、集中と空化の道を歩む重要な手助けとして「愛と献身」を挙げている<sup>15</sup>。禅修行で日常唱える「四弘誓願」においても「衆生無辺誓願度」がトップにくる。

意識の集中と空化という二つの道は、自我の従来<sup>16</sup>の自己同定 (アイデンティフィ

<sup>12</sup> Jäger, W., *Kontemplation*, Freiburg i. Br. 2002, S. 24-29.

<sup>13</sup> *Ibid.*, S. 33. また、Jäger, W., *Suche nach der Wahrheit*, Petersberg 3. Auflage 2002, S. 212-216 も参照。『不可知の雲』の作者の後年の書簡集である『個人カウンセリングの書』第三章では次のように述べられている。「今や、全的にあなたの本体で、つまり、あなたの裸の存在を捧げることで、神を敬うだけで十分なのです。(…) 自己の存在の覚知 (awareness of your being) から、自己の存在の諸属性についての思念をすべて脱ぎ捨ててしまいなさい。そして、自己の存在とその他の被造物の存在に関する一切の個別的な些細事から、完全にあなたの心を空虚 (empty) にしてしまいなさい」(Johnston, William (ed.), *op. cit.*, p. 156)。心を空虚にし、裸の自己の存在の覚知だけになることで、あとは神からの働きを待つのである。

<sup>14</sup> Jäger, W., *Kontemplatives Beten*, Münsterschwarzach 1985, S. 7. 十字架のヨハネは、瞑想の次の観想の段階において、「愛をこめて注意を向けること」について述べている。「そのようにして人間はただ、個々の行為をなすことなく、『愛をこめて注意を向けること』において神のそばにとどまる。そしてその際、自分のほうから努力することなく、端的で単純な『愛をこめて注意を向けること』の内で受動的な態度をとる。それは丁度誰かが愛に満ちた注意でもって目を見開いているようである」(Johannes vom Kreuz, *Die lebendige Liebesflamme*, III 33, Herder-Ausgabe S. 138, 十字架の聖ヨハネ、愛の生ける炎、山口カルメル会改訳、ドン・ボスコ社、1992年(2版)、133頁)。十字架のヨハネに対するイエーガーの見方については、その他 Jäger, W., *Suche nach dem Sinn des Lebens*, Petersberg 6. Auflage 2003 (1. Aufl. 1991?), S. 98-105 を参照のこと。

<sup>15</sup> Jäger, W., *Kontemplation*, S. 29 f.



ケーション) が崩壊するところにまで進んで行く。これまで自分だと思っていたものは、本当の自分ではなかったのである。それはエゴ（自我）にすぎなかった。本当の自己同定は、エゴ（自我）よりもはるかに深いところにまで広がっている（WM51）。

上のように、イエーガーの見るところでは、キリスト教神秘主義の修練と禅修行は、その根本構造をほとんど等しくしている。共通点は、意識の集中と意識の空化である。

### 第3節 キリスト教神秘主義と禅の根本経験の同質性

次に、イエーガーの見るキリスト教神秘主義と禅では、その最終的な根本経験がどの程度似通っているのか検討する。紙幅の制約から最も肝心な点だけを指摘することとどまる。

最終経験への突破は純粋な恩恵による。自我の力で達成できることではない。それは不意に突然訪れる。抽象的に規定するなら、この経験は「一」の経験（*Einheitserfahrung*）であり「不二」（*Nicht-Dualität*）の経験である<sup>16</sup>。

イエーガーは、この「一」ないし「不二」の根本経験を表現するのに、アビラのテレサが『霊魂の城』の「第七の住居」で述べている記述（特に水の比喩と光の比喩）を援用している<sup>17</sup>。

他方、イエーガーは、彼の記述する根本経験の根源の「意識レベル」を「絶対空」と呼んでもいいと言っている<sup>18</sup>。

こうしたイエーガーの記述する根本経験は、色々なレベルと側面から成り立って

<sup>16</sup> Jäger, W., *Das Leben ist Religion*, S. 71.

<sup>17</sup> Teresa von Avila, *Seelenburg*, Freiburg i. Br. 1989, S. 207-239。アビラの聖女テレサ『霊魂の城』（聖母文庫）、聖母の騎士社、1992年、378頁から380頁まで。

<sup>18</sup> Jäger, W., *Das Leben ist Religion*, S. 72。イエーガー個人の根本経験の記述については、さらに以下の書を参照のこと：WM45; Jäger, W., *Wiederkehr der Mystik*, Freiburg i. Br. 2004, S. 150 f. さらに、『観想』は彼の根本経験を敷衍して記述していると思われる：Jäger, W., *Kontemplation*, S. 37 f, 39, 44 f, 46-50, 51-57。ちなみに、イエーガーが好んで挙げる十字架のヨハネの詩に「私は知らないで知らぬ処に入り」という行で始まる詩がある。聖ヨハネが脱魂の後に1586年頃セゴビアで書いたものであるといわれる。この詩は、禅の見性の経験の一面を言い表しているといってもよいほどのものである。ルシアン・マリー編、西宮カルメル会訳注、『十字架の聖ヨハネ詩集』、新世社、2003年、77頁～87頁参照。WM55. Jäger, W., *Suche nach der Wahrheit*, Petersburg, S. 132, 182 f. Jäger, W. [Hrsg.], *Geh den inneren Weg: Texte der Achtsamkeit und Kontemplation*, Freiburg i. Br. 6. Auflage 2001, S. 102 f.

いると見ざるをえないが、その記述の根源の絶対否定面だけを取り上げてみれば、禅でいわれる「真空無相」のレベルを指示しているといつてよい。それは、認識する主観(自我)が消失し、従って主観に対置された客観もすべて消失した根源の(もはや第六識の「意」識ならざる)意識レベルの否定面である。絶対無の場所であり、無相の真の自己の深層の霊的レベルである。廓庵の『十牛図』の第八「人牛俱忘」、空円相に当たるといえよう。本来は言語表現不可能な「言語道断心行處滅」の意識レベルである。

さて、しかし、禅の「真空無相」の経験は、根本経験全体というメダルの片面にすぎない。もう一つの片面は、禅では「真空妙有」の経験といわれる。絶対無から一切が蘇<sup>よみがえ</sup>ってくる場所であり、「一切現成」<sup>げんじょう</sup>ともいわれる。「真空無相」が絶対否定面であるなら、「真空妙有」は絶対肯定面である。「真空無相」と「真空妙有」と両方揃ってワンセットで初めて禅の見性となる。むしろ實際上重要なのは、この後者の「真空妙有」の経験のほうである。廓庵の『十牛図』の第九「返本還源」<sup>へんほんげんげん</sup>に相当する。

イエーガーの根本経験では、初めから、禅の「真空無相」の側面よりも、禅の「真空妙有」とか「一切現成」の経験といわれる側面のほうが非常に強い。若い頃の「サッカー場での神」<sup>19</sup>の経験からしてそうである。この重要な経験の側面を、彼は次のように定式化している。ここでは、「不二」における「一」は「神」と呼ばれている。

神は、樹には樹として、動物には動物として、人間には人間として、天使には天使として顕現しています。これらの存在事物(Wesen)とは別に神があって、それが存在事物にいわばめぐりこんでいるのではありません。そうではなくて、神は、これら存在事物の一つ一つなのです。しかも、神はこれら一つ一つの存在事物に尽きるものではありませんから、これら一つ一つの存在事物ではありません。そうではなくて、常に他の一切でもあるのです。まさしくこの経験を、神秘家はするのです。(WM84f)

ここでは、「神が万物の内に内在する」ということと「神の内に万物はある」ということとが一つのこととして言われている。その限りでこの言明は、「神は樹には樹として顕現している」というような、当惑を引き起こしがちな表現にもかかわらず、正統的なキリスト教神学に違反していないと見てよい。

<sup>19</sup> Jäger, W., *Aufbruch in ein neues Land*, Freiburg i. Br. 2003, S. 15 f.

この文章はイエーガー思想の根本命題であるといえる。

私見であるが、この「神は樹には樹として顕現している」というイエーガーの根本思想は、本邦の天台宗や真言宗でいわれる「草木国土悉皆成仏」というのと変わらないと思われる。

イエーガーは、同じ経験を、彼の偉大な先達の十字架のヨハネもしていると見る。ヨハネにとっては、神は一切の事物に現じているものであった。彼は、「神はその本質において無限の優越性でもってこれら一切の被造物である」（『愛の生ける炎』4章5節）と言っている。「霊の賛歌」という一連の詩群において、その境涯が述べられている。

私の愛する方は 山々  
森におおわれた 人影なき谷  
見たこともない島々  
ひびきわたる流れ  
愛のそよ風の ささやき<sup>20</sup>。

通俗的なキリスト教神学が、神と世界の二元論に立ち、世界の外に存在しつつ人間の罪悪を裁く人格神を想定してしまい、かえって人々の苦しみの種になっているのに対し、キリスト教神秘主義は、神と世界、神と個、神と我とは一つという融和的経験を基礎にもっている（WM79）。

イエーガーは「不二」における「一」を通例「神」と呼んでいるが、術語としては「第一現実」（*Erste Wirklichkeit*）と名付けている。この造語には、禅でいう「這箇<sup>しゃこ</sup>」と同じような意味合いが感ぜられる。

「第一現実」とは、宇宙の生命<sup>いのち</sup>である。それは、禅では「空」であり、ヒンズー教では「ブラフマン」であり、エックハルトにおいては「神性」、タウラーにおいては「最終根拠」と呼ばれたものである、とイエーガーはいう（WM82f）。イエーガーでは、神の経験が空の経験と一つに溶け合っている。彼には、同じ人間が本質的になすことである以上、宗教体験の根本というものは変わらないという確信があるようだ<sup>21</sup>。

「神は樹には樹として顕現している」というイエーガーの事物即神の経験は、禅

<sup>20</sup> ルシアン・マリー編『十字架の聖ヨハネ詩集』、51頁。以上については、Jäger, W., *Kontemplatives Beten*, S. 22-30を参照のこと。

<sup>21</sup> 「私たちは皆人間として同じ根本素質を持っています」（Seitlinger, M. und Höcht-Stöhr [Hrsg.], *op. cit.*, S. 57）。

のほうでは、「一切現成」の経験とか「真空妙有」の経験として叙述されている。ただし、禅経験の場合では、「神」よりも「無相の自己」が主体となって「一切現成」ということが起こる。だから、禅の妙有の経験では、「無相の自己は、樹には樹として、動物には動物として、人間には人間として、顕現している」ということになる。禅のほうでは、釈尊が明けの明星を見て悟ったとき、「あっ、私が光っている」と思ったはずだといわれている<sup>22</sup>。「聞くままにまた心なき身にしあらばおのれなりけり軒の玉水」(道元)といわれている禅の根本経験である。自己がないとき、すべてが自己である。「尽十方世界是沙門全身」(長沙)<sup>23</sup>といわれる。普段は意識されていない自己の根源意識（清浄識）が世界の個々の事物となって現前する。それは丁度、自分の身体が完全に裏返しになって四囲の世界となって現前してくるよう感ぜられる経験である。真如の露現の経験である<sup>24</sup>。だが、それは元々普段からそうなのである。それは、肇論で言われる「天地と我と同根、万物と我と一体」という根本事態であるが、この言い方では、すでに根本経験から万里も懸け離れていると感ぜられる<sup>25</sup>。

上で、禅経験では「神」よりも「無相の自己」が主体となって「一切現成」が起こると述べた。実は、キリスト教神秘主義においても、根本の突破経験においては、神は自己として経験されている。

本当に神を経験することについて、イエーガーは次のように語っている。

本当の突破に到るなら、次のことが成り立ちます。すなわち、経験する者もなく、経験されるものもない、つまり、経験する者が経験されるものと一つであると純粹深層意識において自己経験する、ということが成り立ちます。エックハルトが言っているように、「永遠の言葉においては、現に聞いている者が現に聞かれているものと同一である」のです<sup>26</sup>。

<sup>22</sup> 山田無文『手をあわせる』、しんじん文庫第三集、春秋社、1965年、124頁参照。また、同書の95頁で無文老師は自己の真空妙有の根本経験を語って、「参禅の帰りに、本堂の前の真黄色な銀杏を見たとき、わたくしは飛び上がるほど驚いた。わたくしの心は忽然として開けた。無が爆発して、妙有の世界が現前したではないか」と言っている。要するに、自分自身を、「無相の自己」を見たのである。鈴木大拙や秋月龍珉も、同様の悟りかたをしている。

<sup>23</sup> 景德伝灯録研究会編『景德伝灯録』、四、(巻第一〇・一一・一二)、禅文化研究所、1997年、6頁。長沙の禅思想については、西谷啓治「禅に於ける『法』と『人』」(西谷『禅の立場』、創文社、1986年、所収)にまとまった考察がある。

<sup>24</sup> 「万象の中独露身」(長慶)。

<sup>25</sup> 『碧巖録』第四十則、「南泉一株花」参照。大森曹玄『碧巖録』、上巻、柏樹社、1976年、304頁以下。

<sup>26</sup> Jäger, W., *Kontemplation*, S. 47。また、エックハルトの有名な言葉は次のように言っている、

こうしたことを経験しまして、あとから思い返してみますと、その記憶は、「私は神と一つだった」というのではなく、「私は神だった」なのです<sup>27</sup>。

「私は神だった」といわれるときの「私」は、通常の意識上の自己ではない。通常意識の底の深層の自己である。禅でいわれる「無相の自己」に相当する。一切に現成する自己である。だから、「私は神だった」といわれるイエーガーのキリスト教神秘主義の「神」は、禅の「無相の自己」に対応していると結論してよい。キリスト教神秘主義と禅の間には、そういう体験の同質性がある。

だが、「私は神だった」といえるにしても、人間（個）が増長し、のさばって神（超個）になるのではない。イエーガーは、「波即海、海即波」の華嚴的比喻において、次のように述べている。

もしも波が「俺は海だ」と認めるなら、そこにはまだ二つのものが、波と海があるだけなのです。神秘主義の経験では、この二つということが乗り越えられるのです。波の自我は流れ去り、その代わりに、海が自分自身を波として経験するのです。（WM42）

正確には、波が自分を海だと経験するのではない。海が自分を波として経験するのである。海を世界と言い換えるなら、「世界が私において自身を覚めるのです」（WM113）。ここには、滝沢克己が定式化している個と超個の関係の「不可分・不可同・不可逆」という事態が言い表されている。また同じことであるが、西田のいう「絶対矛盾的自己同一」における「逆対応」の事態が言われている。個から超個へは行けない。超個から個への道が開かれているだけである。だから、個は自分自身を滅するのみである。波は海の波として生きていくだけである。まことに、洞山良价の「過水の偈」に、「渠は今正に是れ我、我は今是れ渠ならず。まさに須らくいんも え恁麼いんも えに会して、はじめていんも え如如いんも えに契いんも えうを得たり」と言われる通りである<sup>28</sup>。

イエーガーのキリスト教神秘主義は、人を神にしてしまい、神と人との違いを抹消してしまうのではない。むしろ、本来の正しい内在的な関係のありかたへともたらそうとしているのである。神が人になるだけである。

なるほどキリスト教と仏教の教理は文字の上で相当異なるであろう。だが、以上の比較からもわかるように、キリスト教中の神秘主義と仏教中の禅の宗教体験は、

「私が神を見る目は、神が私を見る目と同じである。私の目と神の目は、一つの目であり、一つの認識であり、一つの愛である」（*ibid.*, S. 48）。

<sup>27</sup> *Ibid.*, S. 48.

<sup>28</sup> 『洞山録』（柳田聖山編『禅語録』所収）、「世界の名著、続3」、中央公論社、1974、300頁参照。

かなりの程度同質的である。イエーガーは両者の同質性を自分自身の修行の道において確かめた。

結論するなら、イエーガーの双修したキリスト教神秘主義と禅との間には、特に禅で「真空妙有」といわれる経験面において、明瞭な体験の同質性があった。さらに、イエーガーは、この同質の体験に到達するための修行方法の構造もほとんど変わらないことを、自身の修行上で体験した。その方法の構造とは、集中（潜心または三昧）と空化であった。そこから、彼は、「キリスト教神秘主義はその核心において禅宗とまさしく同じことを教えている」と断言できた。核心とは体験である。

-----

#### **キーワード：**

ヴィリギス・イエーガー、キリスト教神秘主義、禅、一切現成、無相の自己、宗教哲学

#### **KEYWORDS:**

Willigi Jäger, Christian Mysticism, Zen, absolute realization, formless self, Religious philosophy